

■ 編集だより

編集後記

新年明けましておめでとうございます。会員の皆様には益々ご健勝のことと存じ申しあげます。精神神経学雑誌は今年で116巻を発刊することになります。精神神経学雑誌は、わが国における精神医学関連の雑誌の中で最も発行部数の多い雑誌になっています。一昨年編集委員長に就任して以来、編集委員会で委員の先生方と共有してきたことは、より親しみやすい雑誌にしたい、症例報告や原著論文など臨床に役立つ論文をできるだけ掲載しようということでした。各委員会報告などは最近ではホームページに掲載されるようになり、迅速な対応がなされてきていますが、本学会誌も時代に沿ったものにするために、雑誌媒体からインターネットを用いたオンラインジャーナルの準備を進めています。雑誌は会員数の増加と共に学会予算の約1/4を占め、その中には約2千万円の郵送費がかかっていることを考えるとオンラインジャーナルの移行を実現しなくてはならないと考えています。すでにオンラインジャーナルのみに移行している学会もありますが、本学会としては会員の理解を得た上で移行をはかる方針です。昨年8月より、オンラインによる投稿システムになり、投稿数が減少するのではないかと危惧していましたが、そのような影響はほとんどなく、安堵しています。シンポジウムの特集原稿と原著論文に対する査読の差というのも問題になりましたが、シンポジウムの特集原稿にも1人の責任査読者が介入することになり、その質は上がってきていると考えています。原著に関しては、これまで通り2人の査読者が入り、さらに最終判断を毎月第一土曜日に開催する20名からなる編集委員会で行いますので、他の商業誌に比べると自ずと厳しくなっているのではないかと推察しています。しかし、できるだけ採択率を上げることを目標にして、教育的な査読をするよう努めていますので、臨床で経験された貴重な症例や原著を会員の皆様にはどしどし投稿して頂くように願っています。ただし、最近では利益相反や倫理委員会での申請がきちんとされているのかなどの規定が厳しくなっていますので、投稿規定を熟読されて十分な配慮をお願い致します。精神神経学雑誌の論文が、わが国を代表とするような論文として評価されることを願っています。神経科学がいかに進歩しても臨床に根ざした研究は、日本語での微妙な表現や精神医学用語が入りますのでやはり和文誌は必要と考えています。これからも精神神経学雑誌への建設的なご意見、投稿を是非お願いします。 中村 純